

50505

教科書文庫

5
810
34-1948
20000 67136

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

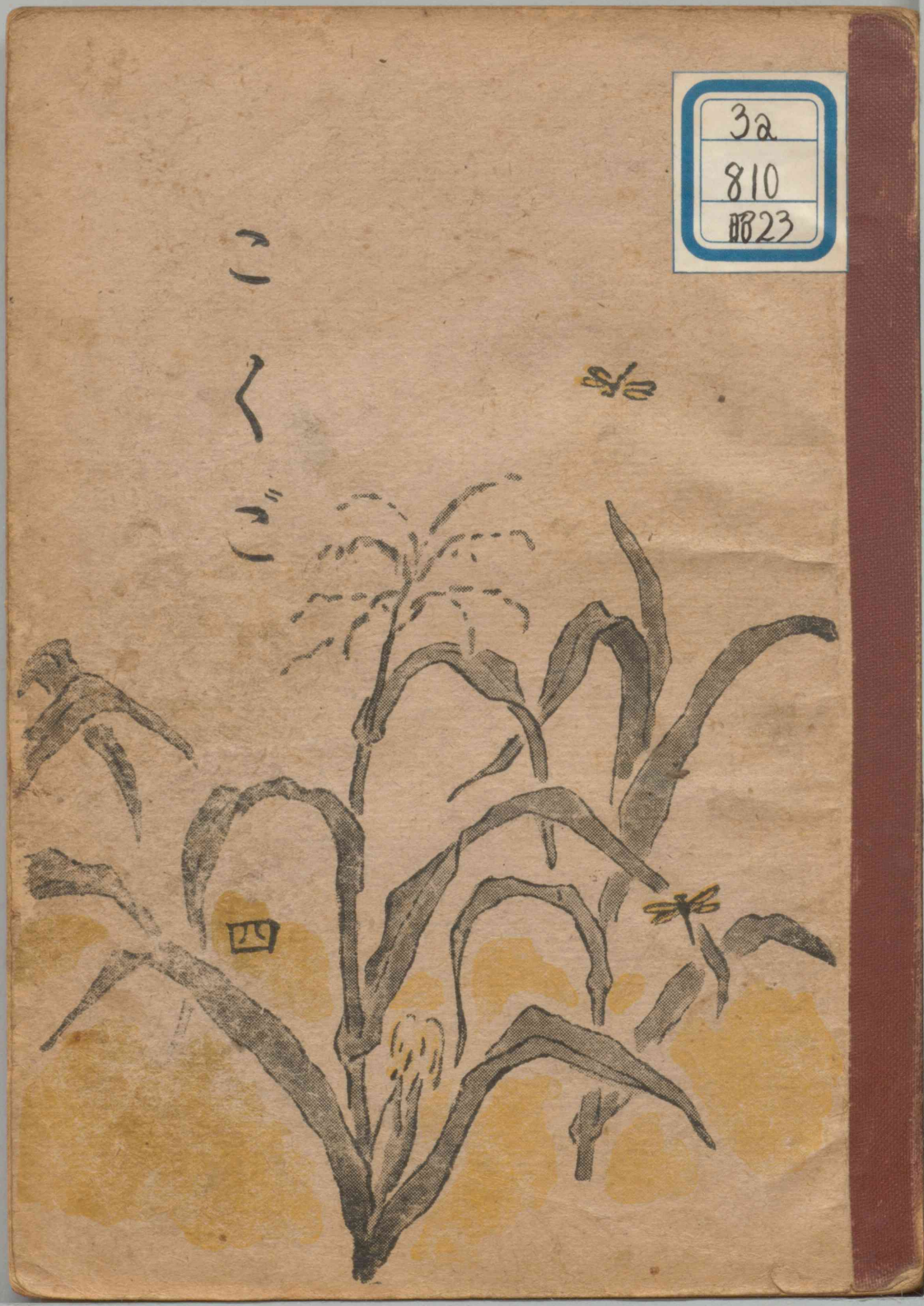
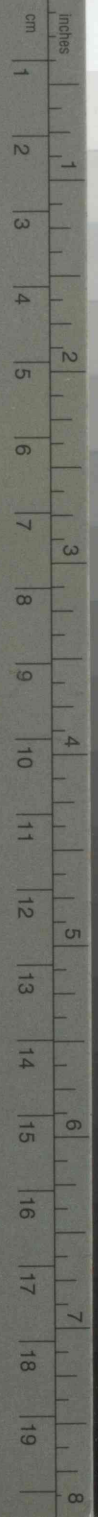


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3a
810
BB23

Handwritten markings on the paper, including a wavy line and some illegible characters.

Small square stamp or mark on the paper.



資料室

こ

く

こ

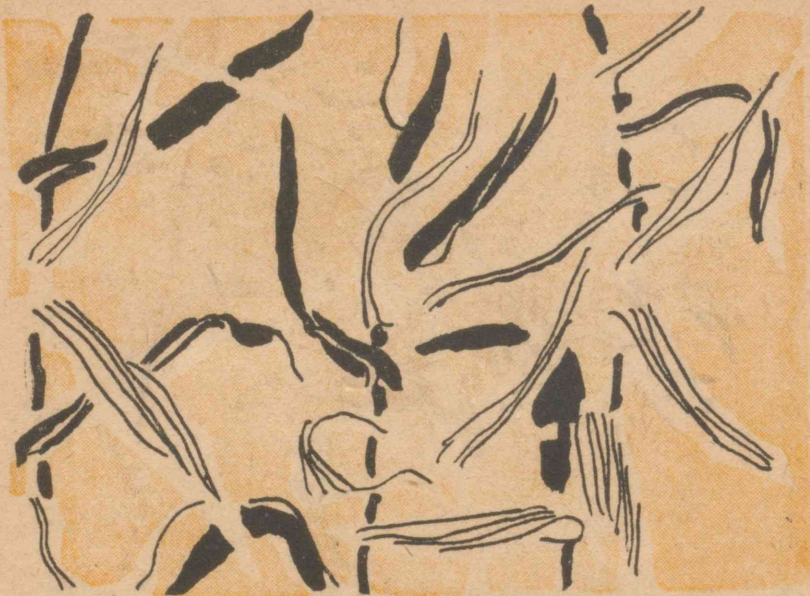
四



32

810

AB23



- 七 いろはがるた……………七十四
- 八 クリスマス……………八十一
- 九 雪……………八十六
- 十 うらしまたろう……………九十六
- 十一 一つのもので……………百二十
- 十二 四季……………百二十四
- 十三 はごろも……………百二十六



- もくろく
- 一 この町……………四
- 二 にわとり……………十四
- 三 いろいろなあいて……………十九
- 四 心に生きている ことば……………三十四
- 五 がんの なかま……………四十一
- 六 ことばあそび……………六十六

一 この町

ここは、町やくばです。

あかちゃんが生まれると、

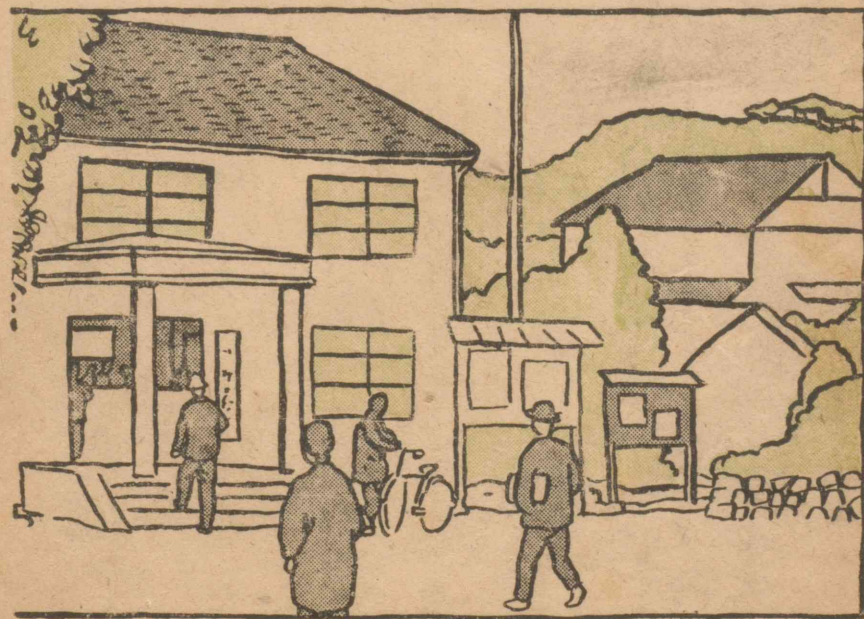
ここに知らせます。

うえぼうそこの知らせは、

ここからきます。

学校にはいる子どもも、

いちいち知らせてくれます。



こうえんのせわや、どうろの
そうじなどもしてくれま

す。もし、人がなくなつた

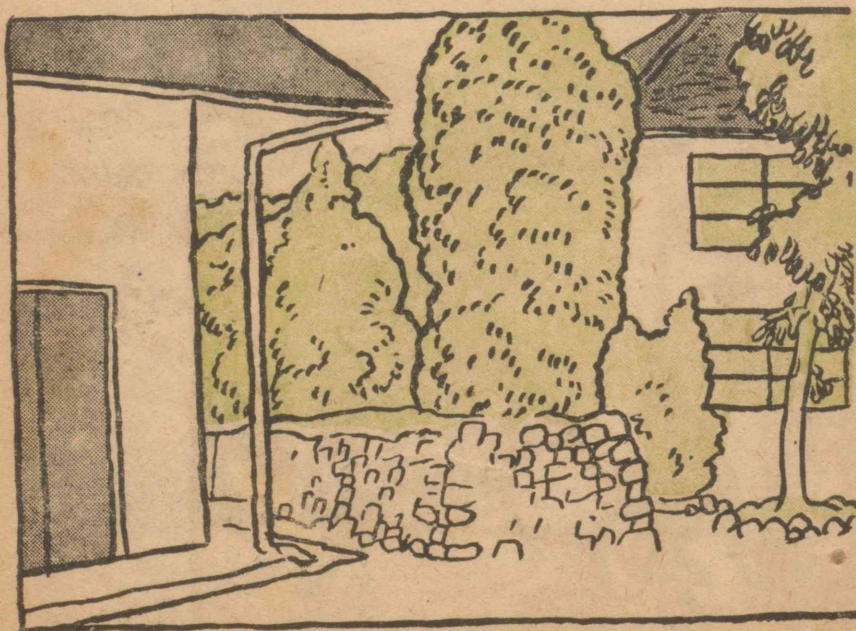
ときには、やはりここに

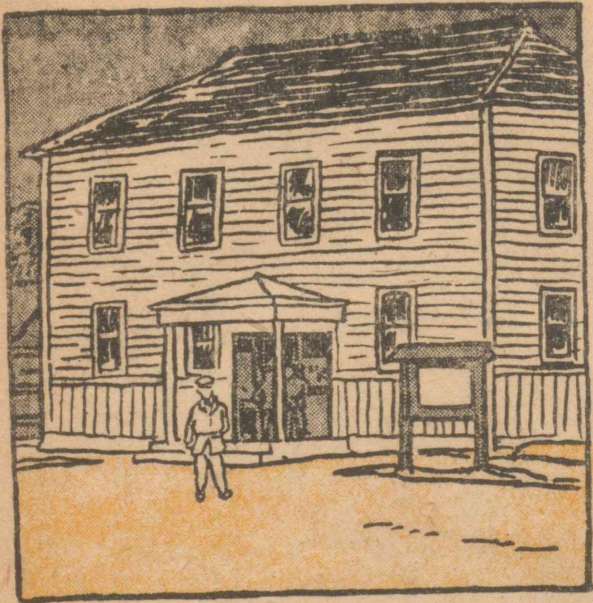
とどけます。

ここはゆうびんきょくで
す。

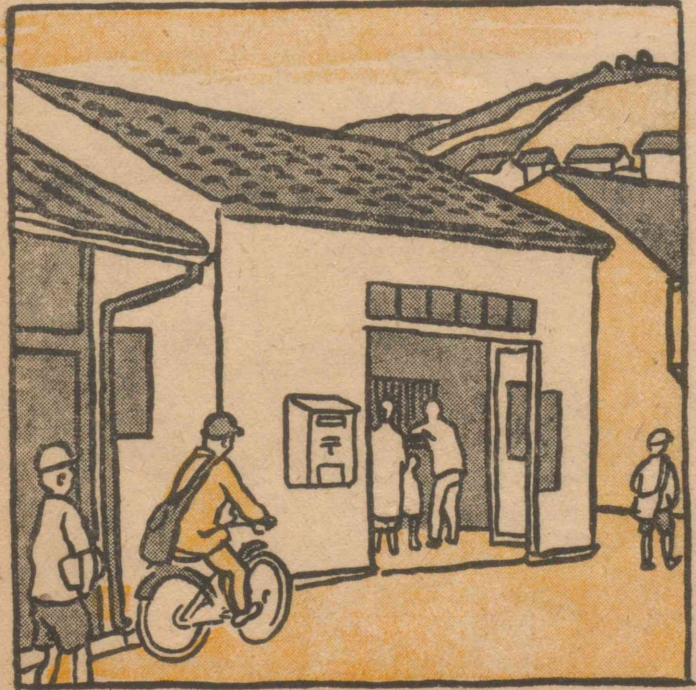
手紙や小づつみなどを

おくってくれます。





いそぐ ときには、でんぼうを うって くれます。
 いろんな ところへでも とどけて くれます。
 もっと いそぐ ときには、
 でんわを とりついで くれ
 ます。「もしもし。」と 声を か
 けて、話が できます。
 世界じゅうの 人の 心を
 つなぐ 糸を、まいにち あ
 つかう ところですよ。



ここは けいさつしよです。
 人々の たいせつな もちものを まもって くれます。
 もっと たいせつな か
 らだを まもって くれま
 す。
 火事が おこらないよう
 に、また わるい びょう
 きが はやらないように、
 氣を つけて くれます。
 こんざつする 町かどで

は、きちんとせいらして
くれます。

まい子をうちまで おく
りどけて くれます。

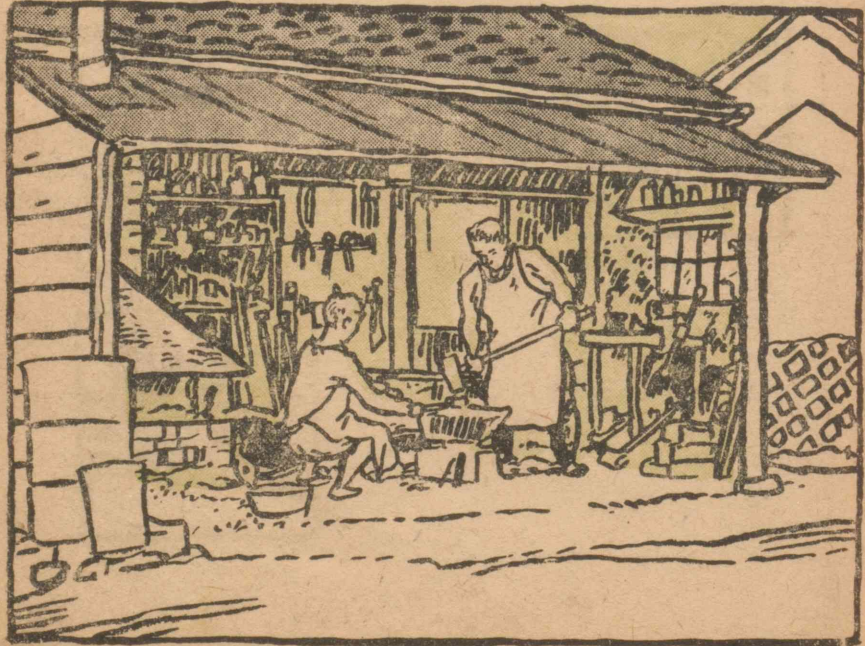
ここは、水のきれいな
いけです。

まわりには、さくらの木
が たくさん うえて あり
ます。よく、みがいた まる

い かがみを、この町に
はめこんだようです。

ここは、町でも ひょうば
んの かじやさんです。
あさから ばんまで、トッ
テンカン トッテンカンと
はたらいて います。

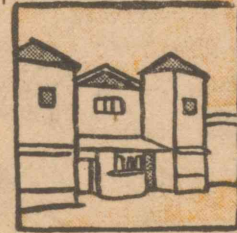
ここは びょういんです。



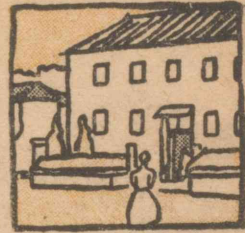


ここは わたくしたちの
 学校です。
 町じゅうの 友だちが み
 んな あつまって きます。
 こくご、しゃかい、さんす
 う、りが、おんがく、ずがこ
 うさく、たいいくなどの べ
 んきょうを します。

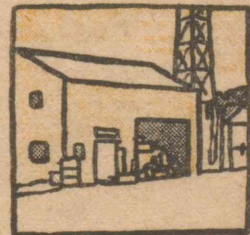
ここは としょかんです。



ここは えいがかんです。



ここは しょうぼうしょです。

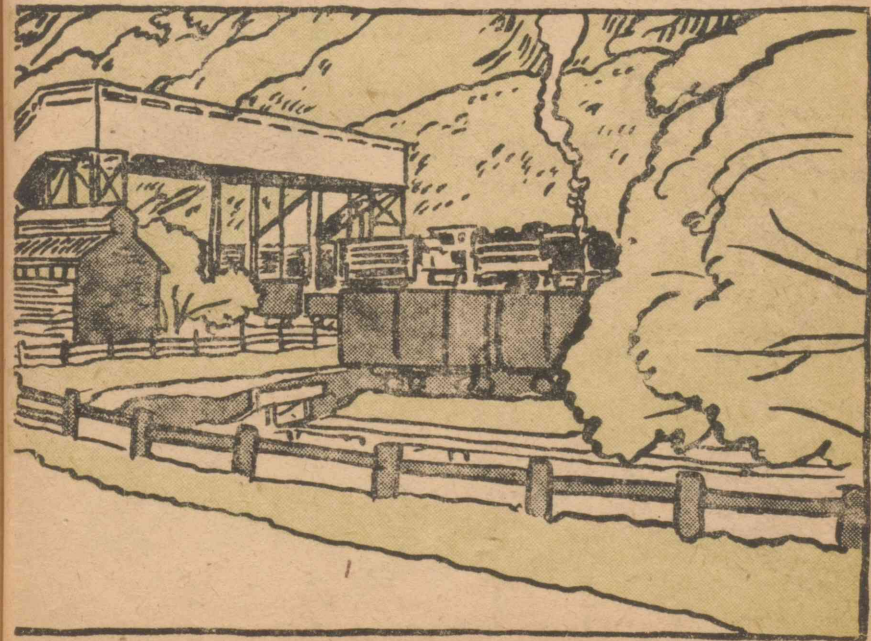


ここは えきです。

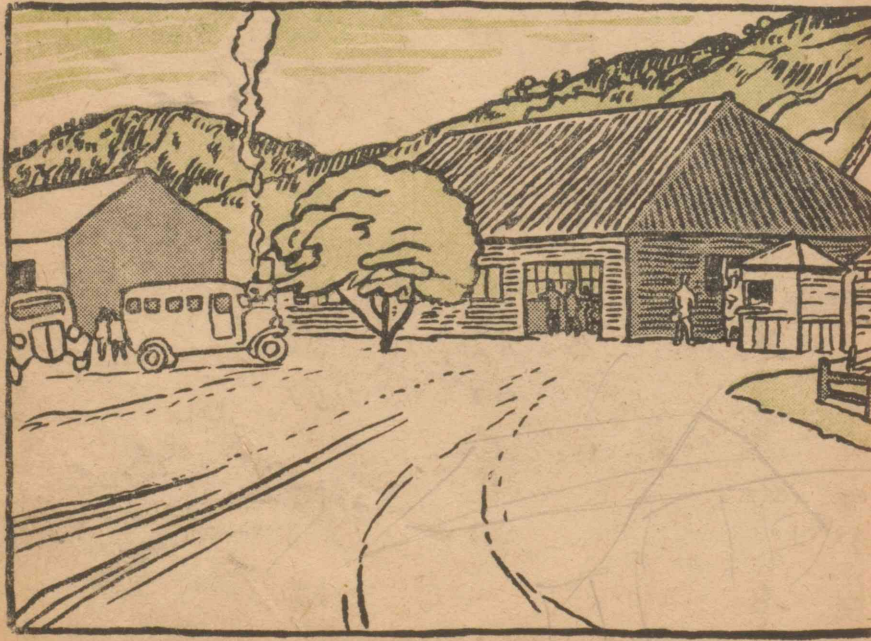
となりの 町と、いったり
きたり します。

ここから、とおい とおい
町へ いく ことが できま
す。

とおい とおい 町から
だいじな ものが ここに
とどきます。



どこも、この 町の 目で
す。この 町の 耳です。こ
の 町の 手と なり 足と
なって、はたらいて います。
町ぜんたいが、ひとつに
なって 生きて います。



二にわとり



にわとりが、かぶのはっぱ
をたべている。

風がふくと、にわとりが
ふわふわふくれる。

むこうぎしの、すすきのも
さもさして、いるところから、

小鳥がとびたつた。

「みんな、しずかに——よしきりがなくから。」

みんなじっとして、いたけれども、なかなかつた。

かくれんぼしたら、わたしがおにになった。

みんな、鳥ごやにかくれていた。

たまごを生んで、いるのをみていた。

えつ子がわたしのせなかでねんねした。

わたしのせなかにかおをつけてねんねした。

おかしをしっかり手にもってねんねした。
せなかがほかほかあたたかい。

ゆうがた、水くみにでた。

おかあさんが、月にてらさ

れて、水をくむ。

くろいかげができてる。

おかあさんのバケツが、お

もそうだ。

バケツの中に月がうつつ

ている。



お星さん、よく光るね。

わたしが手ぬぐいをもっ

て、おふるへいくのがみえ

るの。

学校からかえったら、おか

あさんが、石うすをひいて

いらっしやった。すぐてつだった。おかあさんの手の

上に つかまって ひいた。石うすは、ゴロンゴロンと
いった。

おかあさんに、

「ぼくが いっしょに ひくと、

かるく なるかしら。」

と きいたら、

「ああ、かるいよ。」

と おっしゃった。そこで、お

かあさんの 手の 上で、カいっ

ぱい ひいた。



三 いろいろなる あいて

「文を 書く ことは、お話を するのと おなじ こと
です。」

お話が あいて なしには できないように、文も あ
いて なしには 書ける ものでは ありません。」

先生が こう おっしゃったので、みんなは それぞれ
あいての 人を きめてから、文を 書きました。

まさおさんは、あいての 人を「おかあさん」に きめて、
つぎのような 文を 書きました。

「さっき、みんなと ねこねずみを して あそびました。
みんなで 手を つないで、わを つくりました。ねずみ
みが 三びき、わの 中へ はいり、ねこが 二ひき、
わの そとに できました。ねこの 一びきは、わたくし
です。」

先生が、

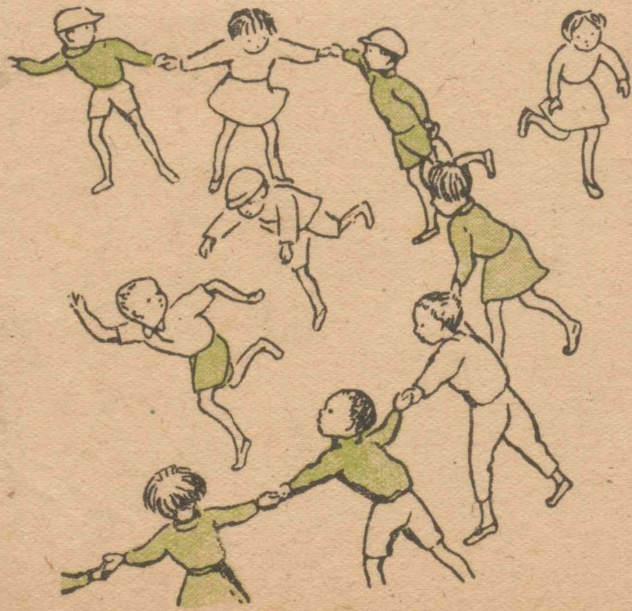
「さあ、用意は いいですか。」
と おっしゃいました。みんなは、

「はい、いいです。」

と こたえました。

ねこの わたくしは、ど
の ねずみを つかまえよ
うかと 考えました。ねず
みたちは、わの 中へ きよ
ろきよろして います。わ
たくしは、ただしさんを

ねらって、わの 中へ もぐりこもうと しました。み
んなは、「きゃっ。」と 言って しゃがみます。あちこち



まわって いる うちに、ぴよいと 中に はいりまし
た。ねずみたちは、あわてて わの そとへ にげまし
た。すると、そとに いた ねこが おいかけました。
もう すこしで、つかまりそうに なった とき、また
わの 中に にげこみました。そこを、わたくしが う
まく つかまえました。

たつおさんは、「にいさんに あてて 文を 書きました。
」きのう えを かきました。なんの えか、あてて ご
らんなさい。ぼくの うちを かいたのです。



やねも、かべも、はしらも かきました。まども かき
ました。あの まどから、に
いさんと よく 星を みま
したね。にいさんは、こんど、
いつ おふねから おかえり
ですか。その ときは、山へ
くりひろいに いきましょう
ね。

にいさんと いっしょに、

ぼくは、大きく になったら、
ふねで はたらきたいと 思

います。

すみこさんは、「いもうとに

あてて 書きました。

「みっちゃんが いなくなっ

てから、もう 半年も た

ちますね。きのうの ゆう

がた、おとなりの まさこ

ちゃんと、あの いけの そばまで さんぼして きま

ました。おみやげに うめもどきを とって きました。

そうして、みっちゃんの しゃしんの まえに かざり
ました。

みっちゃんのことを、みんなでお話ししない日は
ありません。お話をすると、みっちゃんが そばに
くるような 気が します。お花を かざると、そこに
すわって いるようです。わたくしは、みっちゃんが
空を とんで いるだろうと、ときどき 思います。で
も、雨が ふると、どこかで 休んで いると 思いま
す。さようなら。」



のぶごさんは、「りんごに お話を する つもりで 書
きました。



「りんごさんの ほったの 赤いこと。りん
ごさんの かおの まるいこと。りんごさん
は、どこへ いても きれいな。まっ白な
おさらの 上では、おひめさまのようですね。」

たみおさんは、「きりぎりすを あいてに

書きました。



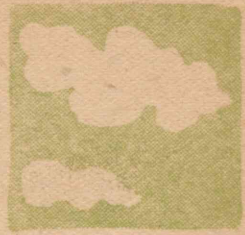
「きみは よく なくね。きみの たいす」

きな きゅうりを あげよう。ねぎも あげよう。もう
しばらく ないて くれたら、かごから はなして あ
げるよ。」



たろうさんは、「ポチ」あてに 書きました。
「あしたの あさも、また かけっこを しょ
うね。 林の むこうの 一本道まで、かけっこを しょ
うね。」

としおさんは、「雲」に 話をする つもりで 書きました。



「白い雲さん、光ってきれいだな。ぼくを
のせてくれないかな。ふわふわと
して、
氣もちが いいだろうな。」

きよしさんは、じぶんを あいて
に書くことに、氣が つきまし
た。

「いま、わたくしが したいと 思
う。ことは、なんだろう。山に

いって、くりひろいをするこ

とかな。ぶどうえんの おじさん

の ところへ いって、あそんで

くる ことかな。おばさんの う

ちへ いって、いもほりの てつ

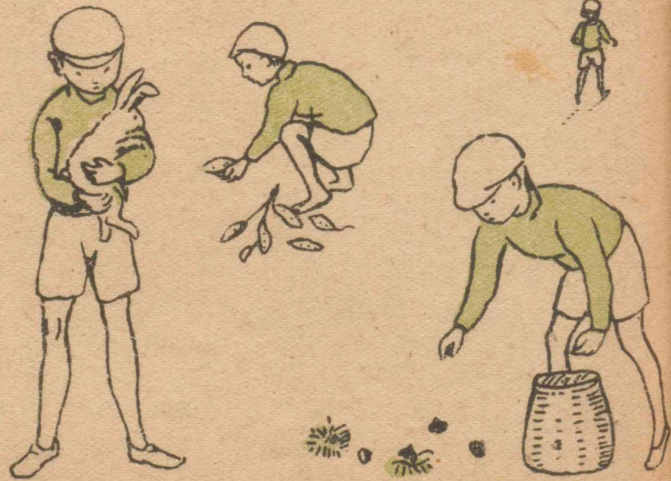
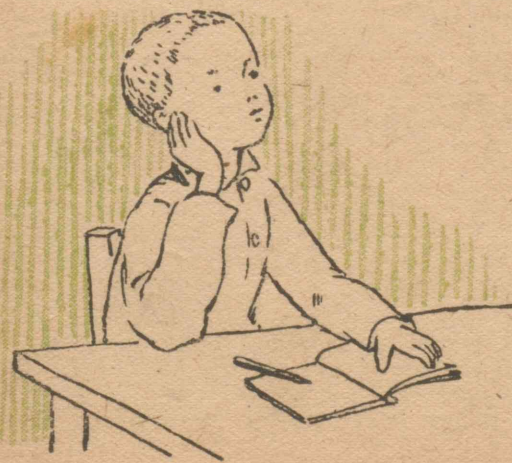
だいを する ことかな。となり

の うちから、うさぎを もらっ

て くる ことかな。じぶんで

じぶん きいて みても、なか

なか はっきりした 返事を して
くれない。





せつこさんは、「くみの人
みんなにきいてもらいた
いと、いって、文を書きま
した。

「にしださんは、きょうも
びょうきで休んでいま
す。それで、みんなでな
にかおみまいをしよう
ではありませんか。おて
がみを書いてもいいし、

えをかいてもいいと思
います。わたくしは、うち
のにわにさいているコス
モスの花をあげよ
うと思ひます。」

かずこさんも、やはり、「
みんなに知らせたいとい
って、つぎのような文を
書きました。

「きのう、学校からかえ
るとき、雨がふっていま
した。わたくしがかさを
さしていくと、むこうで
ようちえんの男の子がな
いいていました。どこか
の中学校の女の子がきて
ないいているわ。」

けを ききました。

男の子は、げたの はなお
が 切れて あるけなかつ
たのです。その 生徒さん
は、すぐ ひもで げたの
はなおを すげて やりま
した。雨が びしゃびしゃ
ふるので、わたくしは、か
さを さしかけて あげま
した。その とき、わたくし



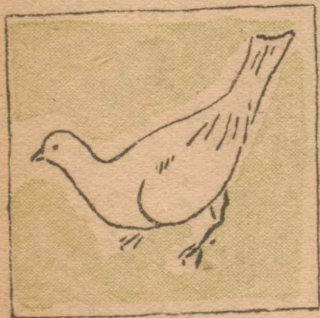
しは、「しんせつに する こと」と いう おとうさんの
ことばを 思いました。

はなおが できあがると、男の子は、それを はいて、
元氣よく かけて 行って しまいました。

女の 生徒さんは わたくしに、

『どうも ありがとう。』

と 行って、わかれて いきました。



四 心に生きて いる ことば

「かずこさんの 書いた 文で、 なにか 氣の ついた ことは ありませんか。」

先生に こう たずねられて、 みんなは、 もう 一ど、 かずこさんの 文を よみなおしました。 けれども、 べつ に 氣が つきません。

「先生は、 かずこさんの おとうさんの ことばに、 氣が つきました。」

ここまで いわれても、 まだ、 なんの ことだか わか りません。

「かずこさんは、 中学校の 女の 生徒さんが 子どもの げたの はなをお、 すげる あいだ、 かさを さして あげたのですね。」

「そうです。」

「その とき、 ふと 思いました ことばが ありますね。」
「おとうさんの ことばです。」

「先生は、 そこに 氣が ついたのです。
おとうさんが おいでに ならなくても、 かずこさんの

耳には、おとうさんのことばが、ひびいてきたので、
す。わかりますか。そこにいなくても、その人の
ことばが生きていると、いうことが、わかりますか。
か。

みんなは、しばらく考えて、いました。
そのとき、たろうさんが、

「先生、こんなことがありました。」

と、いって、つぎのような話をしました。

「わたくしが、きのう、となりのうちに、おつかいに
いきました。そのとき、ぶどうだなの下をとおりに

ました。そこには、ぶどうが、たくさん、おいしそうに
じゅくして、いました。わたくし、

は、たべたくて、しようが、あり、

ませんでした。思いきって、とな

りの、おばさんに、「ぶどうを、く

ださい。」と、いおうと、しました。

そのとき、わたくしの、口を

おさえた、ものが、ありました。

それは、おかあさんの、ことばで、

した。「いやしい、まねを、しては、いけませんよ。」と、い



う 声でした。わたくしは、だまって うちへ かえっ
て きました。」

「それは えらかかった。たろうさん
は、なぜ ぶどうを もらわない
で、かえれたのでしょう。」

「はい。」

「ときこさん。」

「おかあさんの ことばが とめた
からです。」

「そうですね。」



「みんな よかった。」

「ただし、ことばは、いつも、あな

「ここまで 話が すすむと、みんなは、めいめい じぶ
んの ことが 思いだされて き
ました。」

「先生、ありを ころそうと した
とき、にいさんの ことばを 思
いだして、ころしませんでした。」
「先生、さくらの 枝を おろうと
した とき、おじさんの ことば
に 気が ついて やめました。」





三十ぱの がんは、まいにち まいにち、
北へ むかって たびを つづけて いまし
た。
ものさしで きちんと そろえたように
なって どんたり、まがって つりばりのよ
うに なったり しました。ときには、かぎ
なりに なって、空を ひっかけるように

たがたの いい お友だちに なったり、先生に なっ
たり して くれます。
あなたがたは、これから、りっぱな ことばに いろい
ろ であうでしょう。



なりました。ゴムのように のびる こと
とも あるし、きゅっと ちぢむ こと
も ありました。

どのように 列の かたちを かえて
も、ばらばらに なって しまふ こと
は ありませんでした。

「きみ、列を はなれちゃ だめじゃ
ないか。」

「しっけい、しっけい。」

「きみ、きみ、じぶんかってに 早く
とんで いっちゃあ こまるよ。」

「よし、よし。」

がんは、おたがいに いま
しめあって、ぎょうぎよく
空を とびました。

けさも 早くから、三十ぱ
の がんは 目を さましま
した。ゆうべは、ぬまの き
しの、よしの きれいに し
げった ところで、ねむったのでした。



「さあ、出発だ。」

とうばんの　　がんは、大きな　　声で　　さけびました。

「きょうも、きのうと　　おなじ　　じゅんばんに　　ならんで

とぶ　　ことに　　しよう。」

みんなは、それに　　さんせいしました。

ところが、

「それは　　いけないよ。」

と　　いったのは、かっちゃんでした。

「どうして　　いけないの。」

「ぼくは、きのうは　　一ばん　　おしまいだったもの。おし

まいは　　つらいよ。」

「だって、かっちゃんが　　おしまいに　　して　　くれって

いったから、そう　　したんじゃないか。」

でも。」

「でもじゃ　　ないよ。おしまいは　　気が　　らくで　　いいか」

らって、いったじゃ　　ないか。」

「気が　　らくには　　らくさ。でもね、つらいんだよ。」

「なにが　　つらいの。」

「どりのこされるかと　　思ってさ。それに、きけんせんば

んだよ。あとから　　なにか　　おっかけて　　きや　　しない」

かと思つてね。」

「じゃあ、かつちゃん、きょうはどこに
ならびたいと
いうの。」

「そうだな。」

「わがままはもうよすがいいよ。おとといは、一ぱ
ん せんとうに して くれて いったのに。」

「おとといは、そんな 氣もちだつたけれど、きょうは
ちがうんだよ。」

「さあ、きょうは、どの へんに ならびたいと
いうん
だね。」

「まん中が いいな、十五ばんめだ。そこらが 一ぱん
安全らしい。」

「かつちゃんが そう いうなら、十五ばんめに して、
とぶ ことに しようじゃ ないか。」

みんなは そう きめました。

あさの 風は、氣もちよく、がんの むなげに、あたり
ました。

三十ぱの がんは、一列に なつて どんで いきました。
だが、やがて、まつばのような かたちになり
ました。
はたけを こえ、のはらを すぎると、高い 山の そ

ばに きました。

その 山の ふもとには、大きな 木が しげって い
るので、そこを よけて とびました。よく 木の かげ
から ねらいうちを されるからです。

山の 上を 高く とびこえて、たにに さしかかった
とき、かっちゃんか、

「あいたっ。」

と、声を たてました。

ほかの がんは、また、みんなを だまして びっくり
させるのだからと 思って、べつに 氣にも かけないで
とびつづけました。

かっちゃんは、十五ばんめから わきに それたかと
思うと、石ころか なにかの
ように おちて いきました。

「ズドーン。」

下の方から、てっぽうの
音が ひびいて きました。

二十九わの がんは、あわ

てて かっちゃんのところへ あつまりました。

かっちゃんが、いまの てっぽうで やられたと い



う ことが わかりました。

カ の つよい がんが、三ばで、かっちゃんのおちて
いくのを、下から うけとめました。ほかの がんは、右
や 左から かっちゃんを だきかかえました。

「かっちゃん、しっかりしろ。」

「かっちゃん、元気を だせ。」

ほかの ものは、あとに なり、さきになり して、
はげまし はげまし、さげびました。

「ズドーン。」

二はつめの てっぼうの 音が、ひびいて きました。

下から ねらわれて いる ときには、ばらばらになっ
て、はなれて とべば 安全なのですが、いまは、かっちゃん
んを たすけなければ なりません。

だれも、ばらばらに なって、にげようと する もの
は ありません。

「おい、こんどは、ぼくが かわって、かついで いこう。」

「わたしが おんぶしましょう。」

「たのむよ。」

「よしきた。」

かっちゃんは、とぶ 力が なくなつて しまいました。

おもい かつちゃんを かつぎながら 空を とぶのは、
よいいな ことでは ありません。どうか すると、する
りと すべりおちそうに なり、おんぶして いる がん
も おちそうに なります。

「きけんな ところを 早く はなれよう。」

二十九わの がんは、列を きれいに つくるところで
は ありません。ちょうど、一まいの もうふのように
なって、かつちゃんを ささえながら、できるだけ 早く
とびました。

きけんな ところは、どうやら とおりすぎましたが、

目の まえに、高い、高い 山が そびえて いました。

がんの なかまは、この 山の むこうに ある みず
うみの ところへ いかうと 話しあいました。

やっと 高い 山の みねを こえました。

「みずうみが みえた。」

「もう すぐだ。」

みずうみの ほうから、風が ふいて きました。あせ
を いっぱい かいて いる がんたちには、この 風が
なんとも いえない いい 氣もちでした。

みずうみの 島には、こんもりと した 林が ありま



した。がんの なかまは、この 林の 中に
おりました。

一わの がんが、みずうみの きれいな
水を くむと、これを うけとった 一わが、
きず口を ていねいに あらって やりまし
た。ほうたいをもつて いた がんが、手
早く くるくると まきつけました。

かっちゃん は、はねの つけねを うたれ
て いました。かっちゃんは ねつが でて
きたので、みんなが かわるがわる、つめた

い 水で、あたまを ひやして やりました。

島には かりうどは きませんが、大きな へびが やっ
て くる ことが あります。そこで、目ざとい がんが
五六ば、あちこちで みはりばんを しました。

その 夜は、さいわい、雨も ふらず、風も ふかない、
しずかな、星の 光る 夜でした。

かさかさど いう 木の はの 音が しましたが、そ
れは、小鳥たちが、ねぼけて とびまわる 音でした。
つぎの 日の あさ、かっちゃんは、ねつが ずっと
さがって、まぶたを すこし ひらきました。

「かっちゃん、気がついたよ。」

「かっちゃん。」

「いいのかい。」

きず口も だんだん よくなり、みんなが はこんで
くる たべものも、おいしく たべるようになりました。

「もう だいじょうぶだよ。」

「ほんとに よかったね、かっちゃん。」

「あしたの あさ、出発しても いいよ。ぼくたちの た
びが、あんまり おくれるから。」

「だいじょうぶかい。」

「この とおりだ。」

かっちゃんが、立ちあがって はばたきを したので、
みんなは 大よろこびでした。

そこで、その 日の ばんは、かっちゃん
んの 全快いわいを しょうと いう こ
とに なりました。

かっちゃんの すきな おだんごを 作



りました。くだものを あつめたり、花を かざったり
しました。すっかり 用意が できると、みはりばんの
が たちも あつめました。

二十五わ、二十六わ、二十七わ——と、だんだん そろい
ました。

「かつちゃんは、みんなの かおを みて、にこにこしま
した。」

「ぼく、よきようをするよ。ねて いる うちに、いい
こと 考えたんだ。」

こう 言って、かつちゃんは たのしんで いました。
二十九わの かおが そろいました。けれども、もう
一わが みえません。

「どう したんだろう。」

「みはりばんが いない。」

二十九わの がんは、

「おうい、おうい。」

と さげびました。

山びこが むこうで、

「おうい、おうい。」

と こたえるだけでした。

「よし、ぼくが さがして くる。」

「かつちゃんは、どんどん でかけました。」

「りすさん、がんの なかまを みかけなかったかい。」

「知りませんよ。」

「ふくろうさん、がんの なかまを みなかったかい。」

「はてな。」

「小鳥さん、知りませんか。」

「ぞんじません。」

そのうちに、夜になっ

て しまいました。

しかたが ないので、二

十九わの がんは、テーブルの まわりに あつまりました。

どの がんも どの がんも、夜つゆで からだが びっ
しより ぬれていました。

いんそつがかりの がんが、口を ひらいて、

「あすの あさ、出発しよう。ともかく 食事を すませ
て。」

みんなは はしを とりました。

かっちゃんは、

「かみさま、どうぞ なかまを たすけて ください。」

と、おいのりを しました。

二十九わの がんが、食事を すませると、

「さあ、ひとねいりしなければ。」



と、出発がかりの がんが、みんなを 元氣づけました。
みんなの ねて いる ひまに、かっちゃんは、もう
一ど 林の おくを さがしに いきました。しずかな
やぶの ところで、はばたきの 音が きこえます。みる
と、なかまの がんが、へびから ぬけだそうと して、
もがいて いる ところ です。

かっちゃんは、いきなり へびの くびに かみつしま
した。さすがの へびも、いきが くるしく なったので、
力を ゆるめました。その ひまに なかまの がんは、
するりと ぬけだしました。

「さあ、早く、早く。」

かっちゃんは、なかまの 手を とって、いそいで と
んで かえりました。

みんなは、それを みて、おおよろこびでした。

「ああ、よかった、よかった。」

あんしんして、たのしい あさごはんを たべました。

「さあ、でかけよう。」

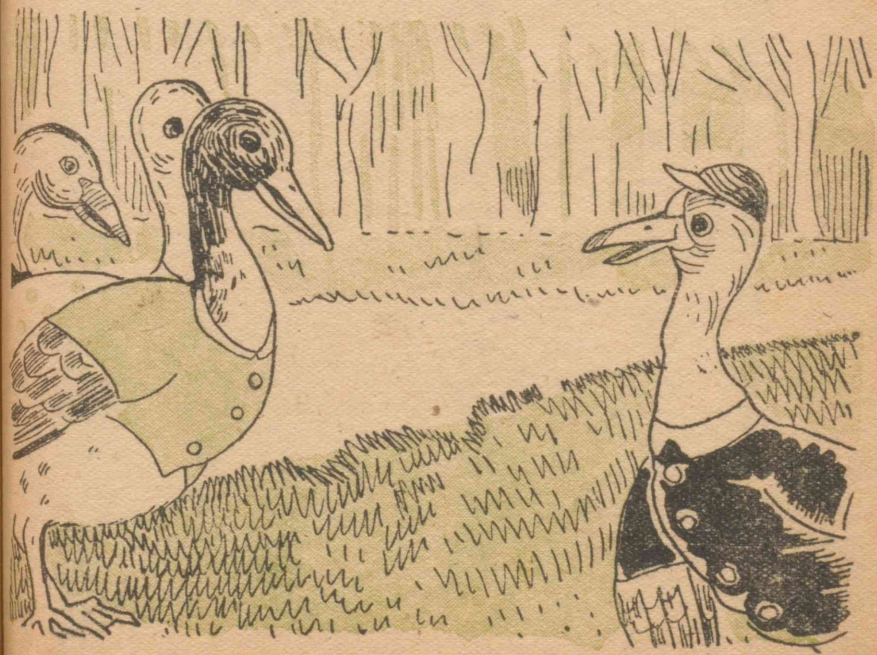
「きょうは、どう ならぼうか、かっちゃん。」

こう いわれて、かっちゃんは、きまりわるそうに に
こにこ わらいました。



ないから、あとのものがじゅんじゅんにたすけていこう。」
 三十ぱのがんは、みずうみの島をとびたちました。うすむらさきの雲が、おだやかにたなびいていました。がんの列は、そのきれいな雲の中に、みえなくなっていきました。

「どうだい、かつちゃん。」
 「どうでもいいや。いまままでのわがまま、ごめんね。」
 「かつちゃんが、わびるように、ちよこんとあたまをさげたので、みんなもわらいました。」
 「じゃあ、かつちゃんは、三ぱんめにしよう。まだ、からだがじゅうぶんでは



六 ことばあそび

「早口あそび」これは、いいに
くい ことばを みつけて、そ
れを まちがえないで、早く
いって あそぶのです。

「かいぶんあそび」これは、上
から よんでも 下から よん
でも、おなじに なる ことば
を 考えだす あそびです。



「なぞあそび」
「ふくびきあそび」

お正月までに、ことばあそび
の たねを たくさん こしら
えて おきましよう。

一組で あつめた「早口あそ
び」。

「かえるが ひどひょこ、ふ



たひよこ みひよこ、あ
わせて ひよこ ひよこ
むひよこ ひよこ。

「うらの 小山の 小いけ
に 子がもが 二百は、
こ米が 一ぴょう、子が
も こ米 かむ、かも
米 かむ。」

「この えんの 下の く
ぎ、ひきぬきにくい。」



二組の あつめた「かいぶん。」

「竹やぶ やけた。」

「たしかに かした。」

「みがかぬ かがみ。」

「ダンスが すんだ。」

「るすを する。」

三組の「なぞ。」

「ゆうだちと かけて、なんと とく。」



ボンボンどけいと とく。

こころは、ふりが やむと、なりも
とまる。」

ラジオと かけて なんと とく。

あきの 花ばたけと とく。

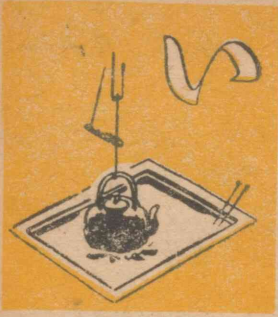
こころは、きくばかり。」

「すずと かけて、なんと とく。

かみなりと とく。

こころは、ふれば なる。」

「いろはの『い』の字と かけて、なんと



とく。

てつびんと とく。

こころは、『ろ』の 上に ある。」

「いろはの『ろ』の字と かけて なんと とく。

あさつゆと とく。

こころは、『は』の 上に ある。」

四組の「ふくびき。」

『ようふくと げた。』

これに あたった 人には、おもちゃの ねこと、

いぬとを あげます。「じゃあ・わん」と いう わ
けです。」

『春風』

これに あたった 人には、ハンケチを あげま
す。これは、「はなを ふく。」と いう わけです。」
『ごおりの てんぷら。』

これを ひいた 人には、なにも あげません。
『あげられません』と いう わけです。」

『ひびの くすり。』

これが あたった 人には、につきちようを あ
げます。『ひびに つける。』と いう わけです。」

みんなで、「いろはがるた」を 考えました。たぐさん お
もしろいのが できました。

これを あつ紙に 書いて、えも つけて、あそべるよ
うに こしらえる ことに しました。



七 いろはがるた

い——いの——一ばん。

ろ——ろを——こぐ

せんどうさん。

は——花のように——きれいな——心。

に——日本一の——ふじの——山。

ほ——星の——きれいな——夜空。

へ——返事は——いつも——はっきりと。

ど——とんぼ、とんぼ、かきねに——とまれ。



ち——小さな——人を——かわいが

れ。

り——りんごの——ような——赤い

ほお。

ぬ——ぬれた——ものは——ほせ。

る——るすいは——しっかり

氣を——つけて。

を——「を」の——字は、——ことば

の——あとに——つく。

わ——わからない——ことは



しらべよう。

か——からだは、いつもきれいに。
よ——よみ、書き、そろばん。



た——高い山、ひくい、たに。
れ——れんげの花が、ひら
いた。

そ——そまつにするな、学
用品。

つ——つめは、のばさぬように。

ね——ねずみと、ねこの、かけっこ。

な——夏と冬。

ら——ラジオの、お話、ききました。

む——麦の花に、ばらの花。

う——うれしい、ときは、どんな、とき。

あ——「あ」の、字は、これから、「い」をつかう。

の——のきばに、すくう、つばめさん。

お——おにさん、こちら、手の、なる、方へ。

く——くじゃくの、まねを、する、からす。

や——山より、高い、ものは、なに。

ま——まつに、月。

け——けっせき しないで

学校へ。

ふ——ふけ 風よ、た

こ あがれ。

こ——こいの たきのぼり。



え——えんぴつを なめないよう

に。

て——てん てん 手まりを つ

きましよう。

あ——雨、ゆき、あられ。

さ——さるの 木のぼり。

き——きしゃと きせん。

ゆ——ゆうべ みた ゆめ。

め——目に みえる もの、

みえない もの。

み——右と 左と ちがえぬ

ように。

し——しもの あさ、白い いき。

ゑ——「ゑ」の 字も これから「え」を つかう。

ひ——火の 用心。



も——ももの 花の さく ころ。
せ——世界の 子ども。
す——すたちする ひばり。



八 クリスマス

(二)

きょうは たのしい クリスマス。
星の きれいな この よるを、
みんなで なかよく あそびましよう。
あかるく かぎった クリスマス。
世界の 子どもに うたわれて、

きょうは、エスさま およろこび。

(三)

わたくしは、ねえさんと
ふたりで、クリスマスツリー
をつくりました。

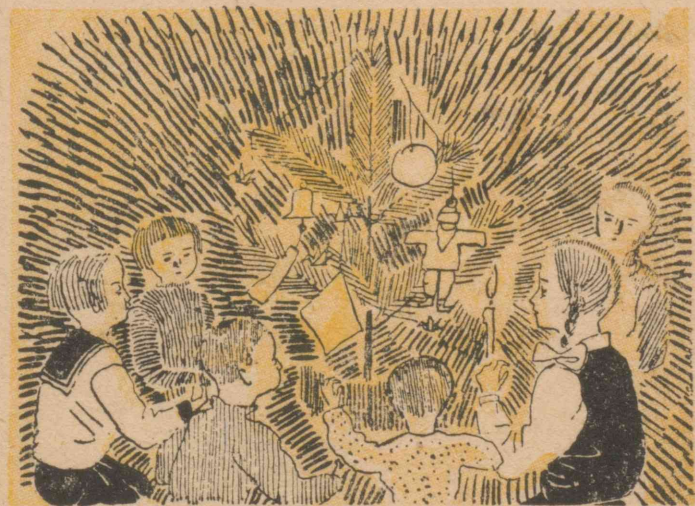
まつの 木の 枝を 立て、
色紙で おった つるや、
ふうせんを 上げました。ぎ
ん紙で こしらえた 小さな

つりがねや、十字かも 上げました。ほそい ろうそくも
立てました。弟が、

「これも 上げて ちょうだい。」
と いった、一まいの えを だしました。それは ふじ
山の えでした。

ねえさんが、赤い きれで なにか こしらえはじめま
した。

赤い ふくを きて、三かくぼうしを かぶり、まっ白
な あごひげを つけた サンタクローズの おじいさん
が できあがりしました。それを まつの 枝の さき
に つりさげると、弟は、



「サンタクロースさんが ぶらんこして いるよ。」
と いったので、ねえさんが わらいました。

その つぎの 日の 夜、お友だちが あつまりました。
クリスマスツリーの そばで、みんなであそびました。

一ばんさきに、ねえさんが、エスさまの おたんじょう
の お話を しました。

二ばんめに、となりの うちの ひでおさんが、おもしろ
い 紙しばいを しました。

三ばんめに、すじむかいの みきこさんが、しょうかを
うたいました。すると、みきこさんの いもうとの たつ
こさんが、それに あわせて おどりました。

おしまい、みんなで トランプあそびを しました。

その とき、おかあさんが、かごに みかんを いれて、
もって いらっしゃいました。

「はい、三つずつ おとりなさい。」

みんなは よろこんで もらいました。

弟が、

「おかあさんの サンタクロースさん。」

と、大きな 声で いったので、みんなが わらいました。

九 雪

ゆうがた、まつの木の
枝は、まがるほど 雪に
つもられて、だまっている。

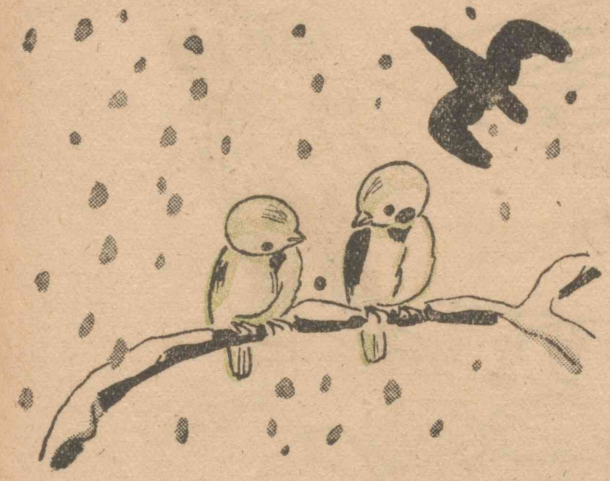
だいこんを ぬいて いる
と、みそさざいが、「チャッ、
チャッ」と ないた。



冬が きたので、よるこん
で ないた。

おとうさんは、町へ いっ
て、まだ かえらない。
さむい。雪が 降るのだろ
うか。風が ふいて きた。
すみがまの 上に、雲が
でて います。

あの 白い 雲に、だれかが、ちぢまって いるように
す。



ちら ちら ちらと 雪が
降る。

すずめ親子の ものがたり。

山は 大雪、日は くれる。

からすが いそいでかえつ
たよ。

からすの かんたは さむい

かるう。

「さあ、やすもうよ。」

と 親すずめ。

「やすみましよう。」と、子すずめが、

「こんやは だいぶ つもるでしよう。」

すずめ親子の ねた あとは、

さら さら さらと 雪の 音。

雪だと いうと、あさ 早く はねおきて、そとに びだして、雪かきを なさる おじいさん。



人のことを思って、ゆう
 びんなげいれ口のまわりを
 さっさとなく。
 ひとはきはいて、うちに
 あがっておいでになると、
 ひたいからゆげがたつ。
 ほおにはあせがつたわっ
 ている。
 けれども、おじいさんはう
 れしそう。

どんなにつもっていて
 も、おかってからはきは
 じめて、かいどうへぬけ
 て、おとなりまではいて
 いく。
 学校へかよう子どもた
 ちのことを思って、お
 もてのとおりをさっさ
 となく。
 しんぶんはいたつする





降った雪はまっ白だ。しかし、降ってくる雪は、まっ黒だ。まっ黒くはないかも しれないが、どうしても、白いものではない。

雪が降りだすと、ぼくはまどからかおをだして空のほうをみあげて、降ってくる雪をながめる。

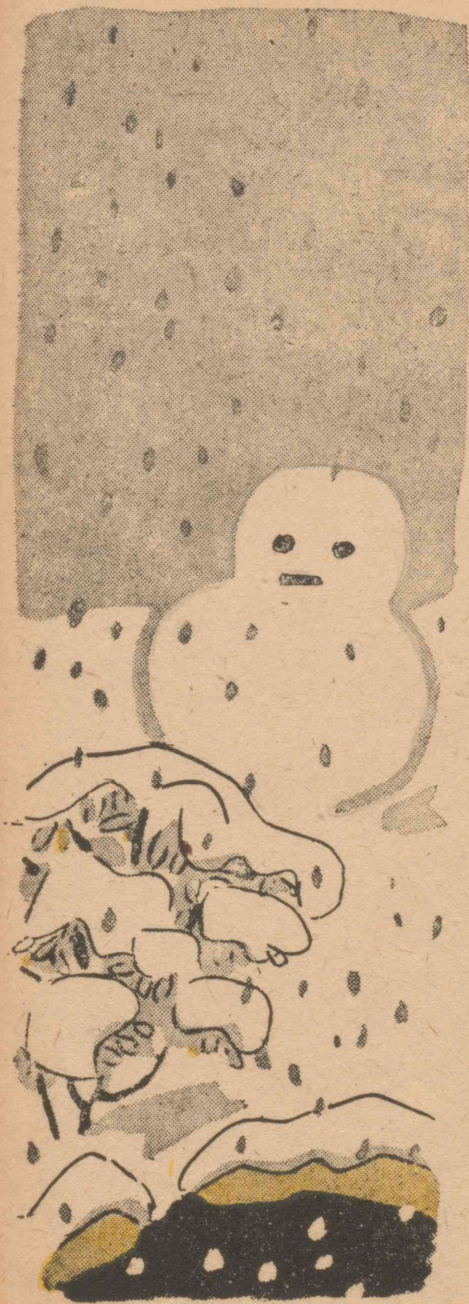
降る、降る。さかんに降る。

右にも 左にも、むこうにも こっちにも、どこにも降る。

風に ふかれて、うずをまいて、どんどん降ってくる。

降ってくる雪はみんな黒い。

雪が かおに かかるのも わすれて、高い 高い 空
の まん中を みあげる。
もく もく もくと、えんとつから すすが とぶよう
に、黒い、こまかい ものが とんで いる。あばれま



わって いる。ひろがったり、あつまったり、ふわふわ
と ながれたり して、だんだん 下におちて くる。
よくも あんなに 雪の たねが ある ものだ。
降って いる 雪を 上から みると、白くて、黒くは
ない。大きな 雪、小さな 雪、雪の かたちは きまっ
て いない。風に ふかれて とんで いるうちに、いっ
しょに なったり わかれたり、また いっしょになっ
たり はなれたり する。

十 うらしまたろう

一の ばめん

でる 人

うらしまたろう

子ども 四人

ところ

うみの そば

四人の 子どもが、一びきの かめを とりまいて、
あそんで います。

子ども一 「この かめを ころがして あそぼう。」

子ども二 「みんなで ころがそうよ。」

みんな 「よいしょ、よいしょ。」

かけ声を かけながら、みんなで かめを ころがしま
す。

そこへ うらしまたろうが とおりかかります。

うらしま 「これこれ、どう したのだ。」

子ども三 「おもしろいから、かめを ころがして いるので
す。」

うらしま 「そんな ことを しては いけない。かわいそう！
だから、はなして おやり。」

子ども四 「だって、ぼくたちが つかまえたのだもの。」

うらしま 「でも、ゆるしておやり。」

みんな 「」

うらしま 「そうだ、わたしに

このかめを うっ
て くないか。」

子ども四 「どうしよう。」

子ども三 「ころがして あそぼ

うよ。」

子ども二 「でも かわいいそうだな。」

な。

子ども一 「この人に うって あげようか。」

みんな 「うん、そうしよう。」

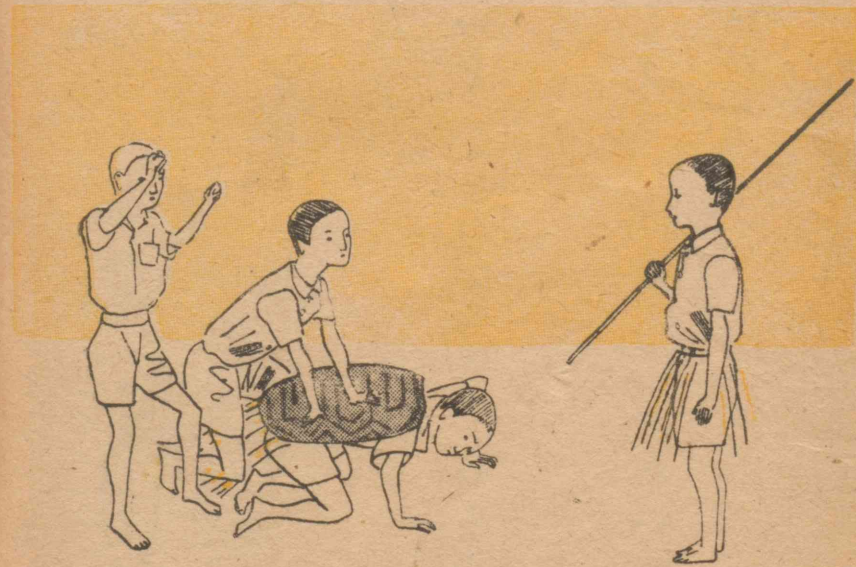
おじさん、おじさん。このかめを うりましょ
う。

うらしま 「うって くれるかね。それは ありがたい。」

うらしまは、おかねを 子どもたちの 手に それぞれ
わたして やります。

みんな 「ありがとう、おじさん。」

子ども一 「さあ、あっちへ 行って あそぼう。」



子どもニ 「いこう、いこう。」

子どもたちは、「わあ、わあ」といいながら、いってしま
います。

うらしま 「かめさん、かめさん。」

うらしまは、かめを だきおこして、せなかを さすっ
て、

うらしま 「かめさん、かめさん。しっかりとささい。」

かめは、手で なみだを ふきながら、なんども おじぎ
を します。

うらしま 「もう、だいじょうぶ。早くうちへ おかえり。」

ちようど ここを

とおりがかって よ

かったね。

さあ、元氣を だし

て おかえり。」

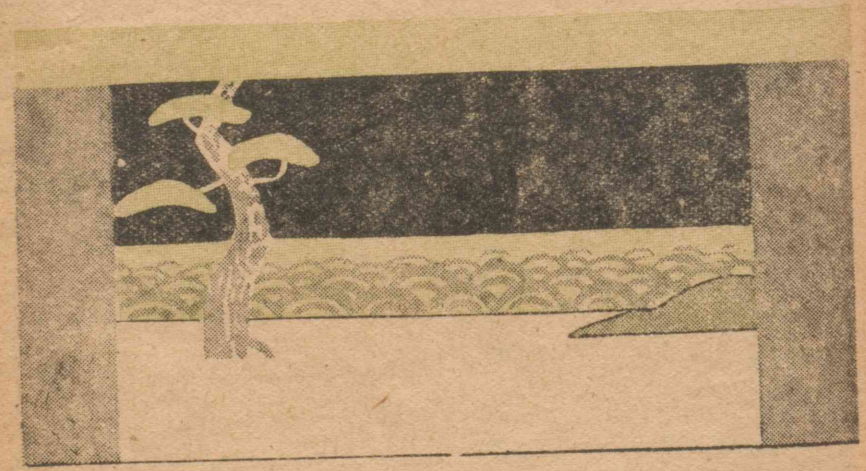
かめは、ていねいに お

じぎを して、海の方

へ いって しまいます。

うらしまは、かめの う

しろすがたを みおくり



ます。

二の ばめん

でる 人 うらしまたろう かめ

ところ うみべと うみの 中

うらしまが、海べで つりを して います。そこへ

かめが でて きます。

かめ 「うらしまさん。」

うらしま

かめ 「うらしまさん。」

かめが よびかけても、うらしまは、いっしんに つりを
して いるので、気が つきません。

かめは、すぐ そばまで 行って、大きな 声で、「うら
しまさん」と います。

うらしま 「おや、だれかと思つたら、かめさんか。」

かめ 「このあいだ、たすけて いただいた かめで こ
ざいます。」

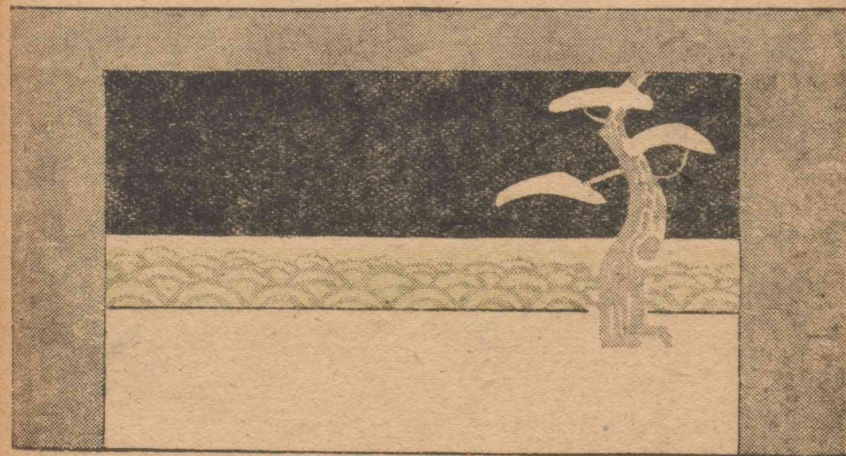
うらしま 「あ、そうか。あの かめさんかい。もう すつか
り 元氣に なつたの。」

かめ 「おかげさまで、この とおり じょうぶに なり。」



ました。あなたの
 お力で、いのちびろ
 いを、いたしました。
 きょうは、お礼に
 あがりました。
 うらしま 「お礼には およばな
 いよ。元氣になっ
 て よかったね。」
 かめ 「お礼に リゅうぐう
 へ おつれしようど

うらしま 「なに リゅうぐうだっ
 て。」
 かめ 「さようで、ごさいます。
 リゅうぐうは、ほんと
 うに、きれいな、とこ
 ろで、ごさいます。」
 うらしま 「それは、おもしろい。
 つれて、いって、もら





おうかな。

かめ「ごあんない いたしましう。」

かめは、うらしまの 手をとって、そこらをぐるぐる
と あるきまわります。

うらしま 「りゅうぐうは、まだ とおいの。」

かめ 「もう じきで ございます。」

うらしま 「いい お天気で 氣もちが いいな。波も しず

かだ。」

かめ 「ごらんささい。うらしまさん。むこうに 光った
やねが みえるでしう。」

うらしま 「ああ、みえる、みえ
る。」

かめ 「あれが りゅうぐう
の ご門で ござい

ます。」

うらしま 「赤や き色で きれ
いだね。」

ああ、だんだん ち
かづいて くる。」

三の ばめん

てる 人 うらしまたろう たい えび

そのほか いろいろな 魚

ところ りゅうぐう

まん中に きれいな こしかけが 二つ おいてあります。

そこへ かめが うらしまを あんないして はいって
きます。

かめ「ここが りゅうぐうで ございます。 さあ、 どうぞ
ぞ こちらへ。」

うらしまは、あたりの

うつくしさに おどろい

て います。

かめ「さあ、どうぞ その

こしかけに おかけ

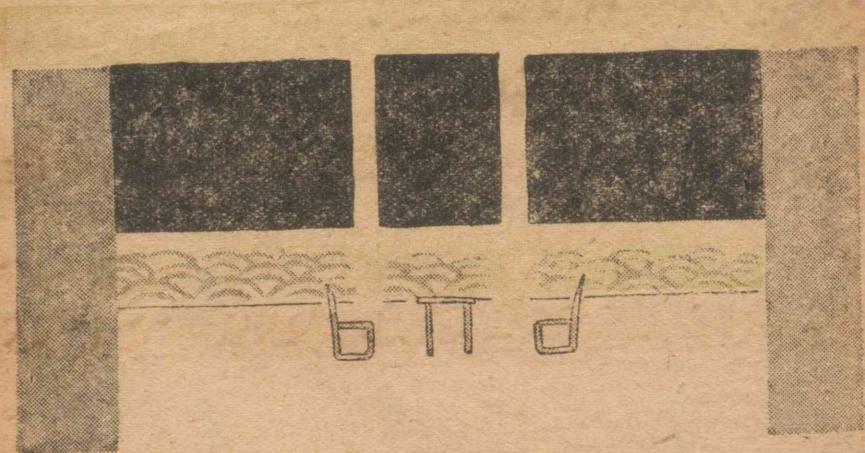
ください。」

うらしまは、右の こし

かけに こしかけます。

いろいろな 魚が でて

きて ならぶと、その



うしろから、おとひめさまがあらわれます。

かめ「このかたが、うらしまさんで、ございます。」

おとひめ「あなたが、うらしまさんで、いらっしゃいますか。」

うらしま「はい、そうです。」

おとひめ「よくおいで、くださいました。このあいだは、

うちの、かめを、おたすけ、くださいまして、あ、
りがどう、ございました。」

うらしま「いや、ちようど、とおりがかった、ところでした、
ので。」

おとひめ「ほんとうに、お礼の、申しようも、ございません。

どうぞ、ゆっくり、あそんで、いって、ください、
ませ。」

おとひめさまは、左の、いすに、こしかけます。

かめは、その、そばに、ならびます。

魚たちは、ごちそうを、はこんで、きます。

おとひめ「さあ、ごえんり、なく、めしあがって、ください。」

うらしま「どうも、ごちそうさま。まるで、ゆめのようだ。」

かめ「りゅうぐうは、いつも、こうなのですよ。」

うらしま「すばらしい、ところだな。」

おとひめ「では、みんなに、おもしろい、おどりを、おどっ、

て もらいましよう。

魚たちが、たくさん べ

て きて、にぎやかな

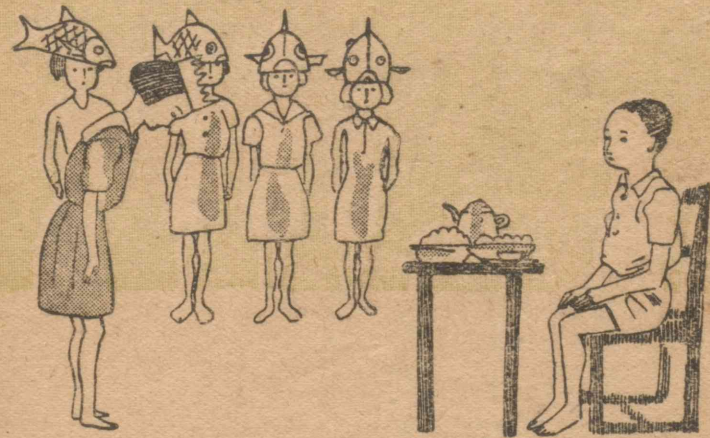
おんがくに あわせて

おどりはじめます。

うらしま 「おもしろい、おもしろい。」

ろい。

手を たたいて よろこびます。



四の ばめん

でる 人も ところも、三の ばめんと おなじ。

ある 日の こと、うらしまは、父や 母の ことを

思いだして、きゆうに 家へ かえりたく なりました。

たい 「これは、まだ さしあげた ことの ない、おい

しい ごちそうで ございます。」

うらしま 「いや、もう じゅうぶん いただきました。」

えび 「では、にぎやかな おどりを して、ごらん

いれましょう。」

うらしま 「ありがとうございます。おどりも もう たくさんです。」

おとひめ 「それでは、なにか かわった ことを して、お
なぐさめ いたしましょう。」

うらしま 「いや、おとひめさま、なにもかも じゅうぶんで
ございます。長い あいだ、ほんとうに おせわ
に なりました。」

おとひめ 「どうか なさいましたか。」

うらしま 「あまり 長く なりますので、もう、おいとまし
ようと 思います。」

おとひめ 「まあ、よろしいでは

ございますませんか。」

うらしま 「でも、うちの こと」

も 氣に かかりま

すので、かえらせて

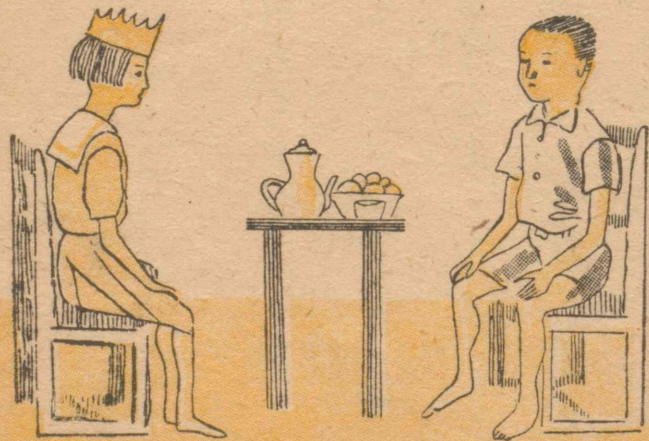
いただきます。」

おとひめ 「さようで、ございま

すか。なんの おか

まいも できません

でした。」



うらしま 「いや、いや、たいへん、たのしい、思いを、させ
て、いただきました。」

おとひめ 「では、おみやげに、たまてばこを、さしあげましょ
う。」

かめが たまてばこを、もって、きます。

おとひめ 「この、たまてばこは、どんな、ことが、あっても、
おあけに、なつては、いけませんよ。」

うらしま 「これは、これは、おみやげまで、いただきまして、
ありがとうございます、ございます。」

うらしまは、たまてばこを、手に、もつて、

うらしま 「これを、あけては、いけないと、いうのですか。」

おとひめ 「そうです。いつまでも、そのままに、して、おい
て、いただきどう、ございます。」

うらしま 「よく、わかりました。それでは、おいとま、いた
します。」

おとひめ 「おかえりに、なりますか。おなごりおしゅう、ご
ざいます。」

うらしま 「さようなら。」

みんな 「さようなら。」

かめ 「わたくしが、また、おともを、いたしましよ。」



だれも知らない 人ばかり。
 とほうに くれた うらしまは、
 あけて みました、 たまてはこ。
 白い けむりが たちのぼり、
 元気で わかい うらしまは、
 みるみる しらがの おじいさ
 ん。
 むかし、 むかしの 話です。

ら、
 生まれた 村に かえった

五の ばめん

おどいめ 「ごきげんよう。お氣
 を つけて。」
 かめが、 うらしまの 手
 を とって、 てて いき
 ます。 みんな、 手を ふつ
 て みおくります。



十一 一つの ものでも

でんとうが つきました。

いままで くらかった へやが、あかるく なりました。

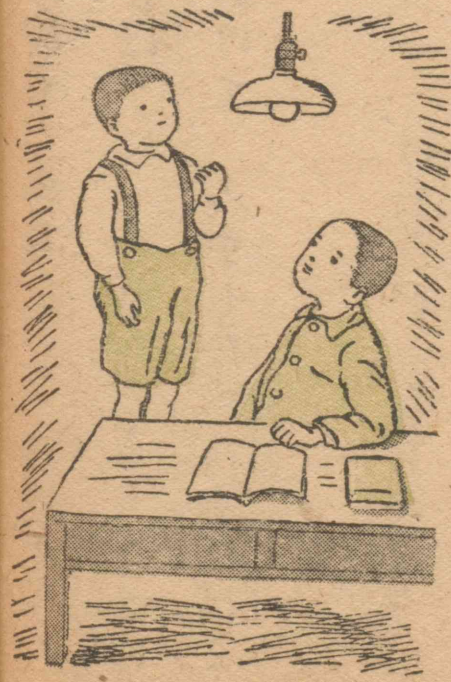
みんなの かおが みえ

ます。本も よめます。字

も 書けます。

たった 一つの でんと

うですが、この 光を だ



す ために、どれほど たくさんの 人が、はたらいて

いる ことでしょう。こんな 小さな ものですが、これ

が できあがるまでには、どれほど 苦心を した こと

でしょう。

でんとうの まるい ガラスは、どうして こしらえた

の でしょう。

光って いる、ほそい 糸のようなものは なんてしよ

う。

光が てるのは なぜでしょう。

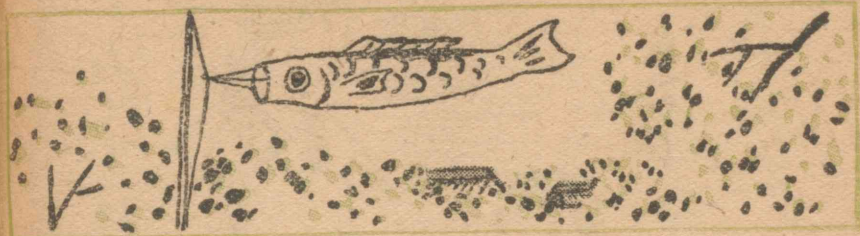
「わたくしは でんきです。とおい とおい 川の 水で
生まれた ものです。それから、みんなの 手で そだ
てられ、長い 長い でんせんを つたわって、ここま
でたびを して きたのです。
けれども、ただ 一つの この でんきゅうが ないと、
光る ことが できません。でんきゅうは わたくしの
かおです。」

ただ 一本の マッチでも、これを 作りあげるまでに
は、どれほど 手がずが かかって いる ことでしょう。



「わたくしは マッチです。わたくしが この 世に 生
まれて くるまでは、なん
百年も、なん千年も、人々
は 不自由な 思いを し
ました。
もえて いる 火を もっ

て あるく かわりに、わたくしを もって あるきます。



十二四季

春

三月は ひなまつり。

四月は さくら。

五月は こいのぼり。

夏

六月は つゆ。

七月は たなぼた。

八月は 水およぎ。

秋

九月は お月見。

十月は うんどうかい。

十一月は きくの花。

冬

十二月は もちつき。

一月は お正月。

二月は うめの花。

十三 はごろも

てる人 りょうし 天人

ところ みほの まつ原

白い はまべの まつ原に、

波が よったり かえったり。

かもめ すいすい とんで いく。

空に かすんだ ふじの 山。

ひとりの りょうしが、みほの まつ原へ てて き
ます。

りょうし 「きょうは いい お天気だ。なんと まあ、いい
けしきだろ。」

けしきに みとれながら あるいて いますと、どこから
か、よい においが して きます。

みると、むこうの まつの 枝に、きれいな ものが、か
かって います。

りょうし 「あれは なんだろ。」

りょうしは、そばへよ?
て、よくみます。

りょうし「きものだな。こんな
きれいな きものは、
みた ことが ない。
もって かえって、
うちの たからに
しよう。」

りょうしは、その きもの
を もって いこうと し

ます。

まつの 木の うしろから、
ひとりの 女が でて き
ます。

女 「もし、それは、わた

くしの きもので
ございます。 どう
なさるので ござい
ますか。

りょうし 「いや、これは、わた



しが ひろったのです。もって かえって、うち
の たからに しようと 思います。』
* 「それは、天人の はごろもと 申しまして、あな
たがたには、ご用の ない もので ございます。
どうぞ お返しくださいます。」



りょうし 「天人の はごろもなら、なおさら お返しは でき
きません。國の たからに いたします。」

天人 「それが ないと、天へ かえる ことが できま
せん。どうぞ、お返しくださいます。」

りょうし 「いや、返せません。」

天人は、かなしそうな かおを して 空を みあげま
す。

天人の しおれた、この ようすを みて、

りょうし 「お氣のどくですから、はごろもを お返し いた
しましう。」

天人「それは、ありがとうございます。ございます。では、こちらへ、ただきましよう。」

りょうし「おまちください。天人の、まいを、まっつて、みせて、ただきませんか。」

天人「それでは、お礼に、まいましょう。でも、そのはごろもが、ないと、まう、ことが、できません。」

りょうし「ど、いって、はごろもを、お返し、したら、あな、たは、まわらずに、かえって、おしまいになるで、しょう。」

天人「天人は、うそど、いう、ことを、知りません。」

りょうし「ああ、これは、はずかしい、ことを、申しました。」

りょうしは、はごろもを、返します。天人は、それを、きいて、しずかに、まいます。

天人「月の、都の、天人たちは、

みんな、そろって、まいじょうず。

黒い、ころもの、そろいで、まえば、

月は、まっ黒、やみの、夜。

白い、ころもの、そろいで、まえば、

月は十五夜、まんまるい。

天人は、まいながら、だんだん

天へのぼって、いきます。

右に 左に ひらひらと、

ゆれる たもとが うつくしい。

白い はまべの まつ原に、

波が よったり、かえったり。



いつの まにやら 天人は、

春の かすみに つつまれて。

かもめ すいすい とんで いく、

空に ほんのり ふじの 山。



こくご 四 第二学年 後期用
 Approved by Ministry of Education
 (Date June 6, 1948)

昭和二十二年十月廿五日翻刻発行
 昭和二十三年六月六日修正印刷
 昭和二十三年六月三十日修正発行
 (昭和二十三年六月六日 文部省検査済)

著作権所有 著作兼発行者 文 部 省

翻刻発行 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社
 代表者 長 得一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社

町	用	枝	正	黒	不
(4)	(20)	(39)	(67)	(92)	(123)
知	意	列	組	礼	自
(4)	(20)	(42)	(67)	(104)	(123)
話	考	出	品	波	由
(6)	(21)	(44)	(76)	(106)	(123)
糸	半	発	夏	申	季
(6)	(24)	(44)	(77)	(110)	(124)
事	林	安	弟	父	秋
(7)	(27)	(47)	(83)	(113)	(125)
氣	返	全	雪	母	原
(7)	(29)	(49)	(86)	(113)	(126)
星	徒	快	降	苦	都
(17)	(31)	(57)	(87)	(121)	(133)
書	元	食	親	千	
(19)	(33)	(61)	(88)	(123)	

○の しるしの ついた かん字は、とう用かん字べっぴよ
 う(きょう)う(い)く(かん)字(に) ない かん字です。

中
本
子
代
子